

「19歳になったら。」



河野通和の特別講義

ある石工（いしく）の話

これは1961年に書かれた本の中に出てくる、ある石積み職人の言葉です。

「金をほしうてやる仕事だが決していい仕事ではない。ことに冬など川の中などでやる仕事は、泣くにも泣けぬつらいことがある」と言いながら、この職人は地方を歩いていて、何でもない田んぼの岸などに、ふと見事な石の積み方がしてあるのに目を留めて、「心をうたれることがある」と語ります。

「こんなところにこの石垣をついた石工は、どんなつもりでこんなに心をこめた仕事をしたのだろうと思って見る。村の人以外には見てくれる人もないのに……。」と。

「しかし石垣つみは仕事をやっている、やはりいい仕事がしたくなる。二度とくずれないような……。そしてそのことだけ考える。つきあげてしまえばそれきりその土地とも縁はきれる。が、いい仕事をしておくとたのしい。あとから来たものが他の家の田の石垣をつくるとき、やっぱり粗末なことではできないものである。まえに来たものがザツな仕事をしておくと、こちらもついザツな仕事をする。（略）結局いい仕事をしてあげば、それは自分ばかりでなく、あとから来るものもその気持をうけついでくれるものだ」

この石工は「いい仕事をして人にほめられたときくらいうれしいものはない。しかし、ほめられなくても自分の気のすむような仕事はしたいものだ」とも語っていたそうです。

「だれに命令せられるのでもなく、自らが自らに命令することのできる尊さを、この人たちは自分の仕事を通して学びとっているようである」と、著者は明らかに感動しています。

出典：宮本常一（1961）庶民の発見 講談社学術文庫より

2017・6・6 河野通和

河野通和のプロフィール

1953年、岡山市生まれ。編集者。東京大学文学部ロシア語ロシア文学科卒業後、

1978年、株式会社中央公論社（現・中央公論新社）入社。雑誌『婦人公論』『中央公論』の編集長を務める。

2008年、株式会社中央公論新社退社。

2009年、株式会社日本ビジネスプレス特別編集顧問就任。

2010年、株式会社新潮社入社。『考える人』の編集長を務める。

2017年3月、『考える人』休刊とともに株式会社新潮社退社。

2017年4月、株式会社ほぼ日入社。

著書に『言葉はこうして生き残った』（ミシマ社）、『「考える人」は本を読む』（角川新書）がある。